

原 著

## 看護大学生の心理社会的発達の特徴 —看護大学生とその他の医療系大学生との比較から—

小野安佳里\*<sup>1</sup> 中新美保子\*<sup>2</sup> 廣川恵子\*<sup>2</sup>

### 要 約

本研究の目的は看護大学生の心理社会的発達の特徴を明らかにすることであった。A 大学に在籍する4,012名を対象として Web 式質問紙を用いた横断的調査を行った。心理社会的発達の評価には、日本語改訂版エリクソン心理社会的発達段階目録 (Erikson Psychosocial Stage Inventory, 以下、日本語版 EPSI とする) を使用した。有効な回答をした1,159名のうち1,157名を分析対象とし、看護大学生 (154名)、国家試験のある大学生 (611名)、国家試験のない大学生 (392名) の3群に分け、比較を行った。3群間の量的データは、Kruskal-Wallis 検定を用いて比較した。全学年の日本語版 EPSI の得点比較において、看護大学生は自主性、同一性が国家試験のない大学生と比較して有意に高く、生殖性が国家試験のある大学生と比較して有意に高かった。学年別の比較では、3年次の看護大学生は、国家試験のない大学生と比較して同一性が有意に高かった。3年次の看護大学生は、看護を学ぶ中で最も重要かつ学びの深い領域実習が2/3程度終了した時期であった。領域実習での様々な経験や対象との関わりを通して、自身の成長を感じ、それが本人の自信となり、同一性の感覚となったと推測できる。また、学生の様々な経験が心理社会的成長を促したとも考えられる。

### 1. 緒言

少子高齢化が一層進み、社会が大きく変化する中で、医療者は対象の多様性・複雑性に対応した医療を提供することが求められている<sup>1)</sup>。看護師等養成所における4年制大学数は年々増加<sup>2)</sup>する一方で、実習施設を確保することが困難で、学生が実習で経験できる内容にばらつきが生じている<sup>1)</sup>。それに加え、2019年末から続く COVID-19 の流行により、これまで通りの講義や演習、実習を行うことができない状況が続いており、現在看護基礎教育においては、オンライン講義やシミュレーションによる演習や学内実習を行うなど、従来の教育方法から大きな転換が行われている<sup>3)</sup>。限られた実習機会の中で、教育の質担保し、より一層効果的な学生指導を行うことが求められている<sup>3)</sup>。

これまで、効果的な実習を行うために、病棟以外での実習の導入<sup>4)</sup>、カンファレンスの工夫<sup>5)</sup>、受け持ち患者との関係構築の支援<sup>6)</sup>、ペア受け持ちやピ

ア・ラーニングの活用<sup>7)</sup>、実習施設や臨床指導者との連携強化<sup>6)</sup>、シミュレーションなどによる実習前教育の導入<sup>8,9)</sup>、看護実践と理論を結びつけるための指導<sup>10)</sup>など、様々な工夫が行われている。その一方で、近年の学生の未熟性や困難への耐性の低下が指摘<sup>11)</sup>されており、学生独自の心理社会的発達や特性によって、実習における充実度やストレス反応に差があることが先行研究<sup>12)</sup>によって明らかにされている。

エリクソンは、人間を青年期以降も生涯に渡って発達し続ける存在として位置づけた。人間の生涯を乳児期、幼児期前期、幼児期後期、学童期、思春期・青年期、成人期、壮年期、老年期の8つの段階に分け、各段階には心理的危機があるとし、その危機の解決が適度な健康的機能に導くと考え、ライフサイクル・モデルとして示した。それぞれの段階における発達課題と危機の解決あるいは失敗は、その人のその後の人格形成に大きな影響を与えるとされてい

\*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健看護学専攻

\*2 川崎医療福祉大学 保健看護学部 保健看護学科

(連絡先) 小野安佳里 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : wa319001@kwmw.jp

る<sup>13-15)</sup>。

大学生の多くは20歳前後の青年期にあたる。エリクソンは青年期の発達課題をアイデンティティの確立としている。また佐々木<sup>16)</sup>は、アイデンティティについて、自分を客観的な目でみつめ、他者からどう見られているかを意識することで、自分という人間を確認して自分はこういう人間であると知ることであると、青年期は、自分を客観視し自己洞察することで、自分の将来について具体的なものとして考える時期であると述べている。

看護大学生は、卒業時に看護師等の国家試験受験資格を得ることから、入学時点において将来の職業をイメージして入学している者が多く、また、専門職を希望する者は、職業レディネスや就職確信度が高い傾向にあり、看護系の学生では、職業レディネスが高いと人間関係志向性も高くなることが報告されている<sup>17)</sup>。

看護学生の心理社会的発達については、日本語改訂版エリクソン心理社会的発達段階目録(Erikson Psychosocial Stage Inventory, 以下、日本語版 EPSI とする)を用いた調査が行われており、看護学生は他学部の学生と比較して、入学時において勤勉性と生殖性が高いことが示されている<sup>12)</sup>。そのほか職業アイデンティティ<sup>18)</sup>や社会人基礎力<sup>19)</sup>の視点からは調査研究されているが、心理社会的な発達全般を調査した研究は、2005年以降には見当たらなかった。社会の変化とともに、学生の心理社会的発達の状況も変化していることが予測される。看護職者は、人間の誕生から死まで様々な場面において、対象者の一番近くで関わる専門職である。他者を信頼し、自分に自信を持つという信頼性から、成功・不成功にかかわらず、自分の過去を受容できるという統合性まで、すべての特性が看護職者として働くうえで必要な要素であると考え、このような看護大学生の心理社会的発達について調査研究を行うことで、現在の学生における発達の特徴を知り、学生の発達の特徴に沿った関わりや指導を行うことができ、より効果的な実習指導を行うことにつながると考える。

### 1.1 研究目的

医療系大学生の心理社会的発達の度合いの実際を調査し、看護大学生とそれ以外の医療系大学生との比較から、看護大学生の心理社会的発達の特徴を明らかにすることを目的とした。

### 1.2 研究の意義

看護大学生の心理社会的発達の特徴を明らかにすることで、今後の学生指導の示唆を得ることができると考える。

### 1.3 用語の定義

日本語版 EPSI の下位尺度については、この研究で使用される尺度開発者である中西ら<sup>13)</sup>の定義を使用し、次のように定義した。

信頼性：他者を信頼できるとともに、自分に対して自信の感覚をもつこと。

自律性：自分が独自の存在であることに気づいており、自分の意思で物事を選択したり、行為を統制したりすることができる、また、感情を平靜に保つために自己コントロールができること。

自主性：物事に対して積極的に取り組み、自分で決断をするとともに責任を取ろうとすること。

勤勉性：目標に向かって学習者としての自己を見出し、その成果に対する周囲からの承認を得て、自己の有能性と社会的価値を確認し、自尊感情を高めようとする感覚をもつこと。

同一性：この自分でよいという自己肯定感と、これからもこの自分でやってけるという自信をもち、さらには、この自分は社会から受け入れられているという感覚をもつこと。

親密性：相手の個別性を尊重したうえでお互いに信頼し協力し合いながら、相互の欲求を満足させるという相互性の発達感覚をもつこと。

生殖性：自分の子どもをもつという意味だけでなく、他人や社会に尽力して価値観や伝統を伝え、福祉、教育などの向上に役立ちたいという感覚を持つこと。

統合性：自我同一性の累計の結果としてえられるもので、成功・不成功を問わず自分の過去を受容できること。

また、医療系の大学生の内訳として、A 大学に所属する学部生を「看護大学生」、「医療系大学生のうち、国家資格の取得を目指す学科の大学生(以下、国家試験のある大学生とする)」、「医療系大学生のうち、国家試験のある大学生以外の大学生(以下、国家試験のない大学生とする)」の3群に分類、定義した。

## 2. 方法

### 2.1 研究デザイン

無記名式の Web 式質問紙を用いた横断的調査を行った。

### 2.2 調査対象者

医療系大学である A 大学の17学科に所属している4,012名の学生(1年生1,017名、2年生999名、3年生1,018名、4年生978名)を調査対象とした。

### 2.3 調査時期

調査期間は2021年11月末～2022年1月末とした。

回答は、調査依頼用紙を受け取って3週間以内とした。

## 2. 4 調査内容

### 2. 4. 1 基本属性

属性は所属学科、学年、年代、性別の4項目を調査した。

### 2. 4. 2 心理社会的発達の測定尺度について

本研究では、心理社会的発達を測定する尺度として、日本語版 EPSI を使用した。日本語版 EPSI の原版は、エリクソンの心理社会的発達課題に対する達成感覚を測定評価するために Rosenthal ら (1981) により開発され、中西・佐方が日本語版への改定 (1983)、再改定 (1993) を行った<sup>13)</sup>。日本語版 EPSI は、信頼性、自律性、自主性、勤勉性、同一性、親密性、生殖性、統合性の8下位尺度から構成され、各下位尺度に7項目、31の逆転項目を含む合計56項目からなる質問紙調査である。回答方法は、「1. 非常にそう思う (5点)」「2. そう思う (4点)」「3. どちらでもない (3点)」「4. そう思わない (2点)」「5. 全くそう思わない (1点)」の5件法である。各下位尺度の平均点を算出して評価する。なお、尺度の使用にあたっては、日本語版 EPSI の尺度開発者に許可を得た。

### 2. 5 手続き

A 大学の各学科の学科長に調査に関する説明および協力依頼を行い、許可を得た。学年ごとに必修科目の講義前もしくは講義後の時間を利用して、調査依頼用紙を配布した。配布の際、調査依頼用紙を読んで調査協力に同意する場合は、調査期間内の都合の良い時間に、調査依頼用紙に記載されている QR コードからアンケート調査に参加するよう口頭にて説明した。また、調査期間内に学生が登校しないなどの理由で、研究者が調査依頼用紙を配布できない学科・学年においては、その学科長が指示する者へ、学生への調査依頼用紙の配布を依頼した。

アンケート調査は Microsoft Office Forms を使用して行った。対象者に、調査期間内に調査依頼用紙に記載されている QR コードからアンケート調査に参加するよう依頼した。

### 2. 6 分析方法

記述統計により分析を行った。属性については単純集計を行った。

日本語版 EPSI は各下位尺度の平均点を算出し、母集団の Shapiro-Wilk 検定を行ったところ、 $p < 0.05$ であったため正規分布に従わないと判断し、以下のノンパラメトリック検定を行った。看護大学生・国家試験のある大学生・国家試験のない大学生の3群間で、Kruskal-Wallis 検定およびペアごとの比較 (Dunn または Dunn-Bonferroni の方法) を用いて

分析した。統計解析は SPSS Statistics ver.23 を用いて行った。有意水準は5%とした。

## 3. 結果

調査依頼用紙は4,021名 (1年生1,017名、2年生999名、3年生1,018名、4年生978名) に配布し、1,390名から回答を得た (回収率34.6%)。そのうち、分析に必要な項目 (所属学科、年代、日本語版 EPSI) の回答に不備のない1,159名を有効回答とした (有効回答率83.2%)。そのうち、30代で社会人経験のある2名を除いた1,157名を分析対象とした。アンケートの回答に要する平均時間は8分13秒であった。

### 3. 1 対象者の基本属性

1年生243名、2年生325名、3年生238名、4年生351名であった。看護大学生は154名で、1年生18名、2年生32名、3年生31名、4年生73名であった。国家試験のある大学生は611名で、1年生131名、2年生145名、3年生122名、4年生213名であった。国家試験のない大学生は392名で、1年生94名、2年生148名、3年生85名、4年生65名であった。

性別は、男性263名 (22.7%)、女性882名 (76.2%)、答えたくない/無回答12名 (1%) であった。年齢は、10代334名 (28.9%)、20代823名 (71.1%) であった。

### 3. 2 医療系大学生の心理社会的発達の度合い

#### 3. 2. 1 全大学生、看護大学生、国家試験のある大学生、国家試験のない大学生の8下位尺度の平均点 (表1、図1)

全大学生の平均点は、信頼性2.93、自律性3.04、自主性2.90、勤勉性3.16、同一性3.40、親密性3.45、生殖性2.78、統合性3.32であった。看護大学生の平均点は、信頼性2.98、自律性3.06、自主性2.99、勤勉性3.20、同一性3.49、親密性3.53、生殖性2.86、統合性3.40であった。国家試験のある大学生の平均点は、信頼性2.93、自律性3.07、自主性2.91、勤勉性3.17、同一性3.44、親密性3.45、生殖性2.74、統合性3.31であった。国家試験のない大学生の平均点は、信頼性2.92、自律性2.98、自主性2.85、勤勉性3.13、同一性3.30、親密性3.43、生殖性2.80、統合性3.31であった。

#### 3. 2. 2 看護大学生、国家試験のある大学生、国家試験のない大学生の日本語版 EPSI 得点の比較 (全学年) (表2)

信頼性、自律性、勤勉性、親密性、統合性では、3群間で有意差はみられなかった。自主性においては、看護大学生と国家試験のない大学生との間で有意差がみられた ( $p=0.010$ )。また、同一性では、看護大学生と国家試験のない大学生、国家試験のある大学生と国家試験のない大学生の間で有意差がみられた (それぞれ  $p=0.001$ ,  $p<0.001$ )。生殖性では看



表3 看護大学生、国家試験のある大学生、国家試験のない大学生の8下位尺度得点の比較 (各学年)

学年	3群	n	信頼性			自律性			自主性			勤勉性		
			中央値	25パーセ ンタイル	75パーセ ンタイル	平均値	中央値	25パーセ ンタイル	75パーセ ンタイル	平均値	中央値	25パーセ ンタイル	75パーセ ンタイル	平均値
1年生	看護大学生	18	3.00	(2.71 -3.29)	3.05	3.07	(2.71 -3.71)	3.22	3.00	(2.57 -3.57)	3.00	3.29	(2.43 -3.71)	3.13
	国家試験のある大学生	131	2.86	(2.57 -3.29)	2.86	3.00	(2.57 -3.43)	2.98	2.86	(2.43 -3.14)	2.82	3.00	(2.71 -3.43)	3.08
	国家試験のない大学生	94	3.00	(2.43 -3.29)	2.89	2.86	(2.43 -3.43)	2.92	2.86	(2.43 -3.14)	2.82	3.29	(2.86 -3.43)	3.10
2年生	看護大学生	32	2.71	(2.36 -3.00)	2.75	2.71	(2.29 -3.21)	2.81	2.57	(2.29 -3.14)	2.73	3.00	(2.36 -3.57)	3.00
	国家試験のある大学生	145	3.00	(2.57 -3.29)	2.93	3.00	(2.57 -3.57)	3.08	2.86	(2.57 -3.29)	2.92	3.14	(2.71 -3.71)	3.15
	国家試験のない大学生	148	2.86	(2.43 -3.29)	2.91	2.86	(2.43 -3.36)	2.95	2.79	(2.43 -3.14)	2.83	3.14	(2.71 -3.43)	3.08
3年生	看護大学生	31	3.00	(2.71 -3.14)	2.93	3.00	(2.43 -3.57)	3.01	3.00	(2.57 -3.36)	2.99	3.29	(2.86 -3.57)	3.23
	国家試験のある大学生	122	2.86	(2.57 -3.29)	2.94	3.00	(2.57 -3.43)	2.99	2.93	(2.57 -3.29)	2.93	3.14	(2.71 -3.43)	3.10
	国家試験のない大学生	85	3.00	(2.57 -3.43)	2.92	3.00	(2.43 -3.43)	3.00	2.86	(2.29 -3.29)	2.83	3.00	(2.57 -3.57)	3.07
4年生	看護大学生	73	3.00	(2.86 -3.43)	3.08	3.14	(2.71 -3.57)	3.16	3.14	(2.71 -3.57)	3.10	3.43	(2.86 -3.71)	3.30
	国家試験のある大学生	213	3.00	(2.57 -3.43)	2.96	3.14	(2.71 -3.57)	3.16	3.00	(2.57 -3.43)	2.95	3.29	(2.86 -3.71)	3.27
	国家試験のない大学生	65	3.00	(2.71 -3.43)	3.00	3.14	(2.86 -3.43)	3.12	2.86	(2.57 -3.29)	2.95	3.43	(3.00 -3.71)	3.35
同一性														
1年生	看護大学生	18	3.57	(3.00 -3.86)	3.47	3.50	(3.14 -4.00)	3.59	2.86	(2.57 -3.14)	2.90	3.43	(3.14 -3.71)	3.37
	国家試験のある大学生	131	3.43	(3.00 -3.86)	3.38	3.43	(3.00 -3.79)	3.46	2.71	(2.29 -3.00)	2.70	3.29	(2.71 -3.64)	3.25
	国家試験のない大学生	94	3.29	(2.86 -3.71)	3.27	3.43	(3.00 -3.71)	3.41	3.00	(2.57 -3.29)	2.93	3.29	(2.86 -3.71)	3.28
2年生	看護大学生	32	3.29	(2.71 -3.71)	3.27	3.36	(2.86 -3.86)	3.33	2.71	(2.36 -3.29)	2.77	3.14	(2.64 -3.57)	3.15
	国家試験のある大学生	145	3.43	(3.00 -3.86)	3.41	3.57	(3.00 -3.86)	3.46	2.71	(2.43 -3.14)	2.79	3.29	(3.00 -3.71)	3.33
	国家試験のない大学生	148	3.29	(2.86 -3.71)	3.27	3.43	(2.93 -3.86)	3.40	2.79	(2.21 -3.14)	2.74	3.29	(2.86 -3.86)	3.34
3年生	看護大学生	31	3.57	(3.43 -3.79)	3.56	3.57	(3.29 -3.93)	3.61	2.86	(2.57 -3.07)	2.84	3.57	(3.07 -3.93)	3.51
	国家試験のある大学生	122	3.29	(2.86 -3.86)	3.31	3.57	(3.00 -3.86)	3.44	2.86	(2.29 -3.14)	2.70	3.29	(2.86 -3.71)	3.29
	国家試験のない大学生	85	3.29	(2.86 -3.57)	3.24	3.57	(3.00 -3.86)	3.37	2.71	(2.29 -3.14)	2.71	3.29	(2.86 -3.71)	3.27
4年生	看護大学生	73	3.57	(3.14 -4.00)	3.56	3.57	(3.29 -4.00)	3.56	2.86	(2.43 -3.29)	2.90	3.57	(3.00 -3.86)	3.48
	国家試験のある大学生	213	3.57	(3.14 -4.00)	3.56	3.43	(3.00 -3.86)	3.45	2.86	(2.29 -3.14)	2.75	3.29	(3.00 -3.71)	3.34
	国家試験のない大学生	65	3.57	(3.00 -4.00)	3.50	3.57	(3.14 -4.00)	3.59	2.86	(2.57 -3.29)	2.86	3.43	(3.00 -3.86)	3.34

Kruskal-Wallis検定 \*p<0.05  
得点範囲：最大値5-最小値1

のない大学生との間で有意差がみられた( $p=0.001$ ).

### 3.2.3.2 2年生の日本語版 EPSI 得点の比較

2年生の各下位尺度の平均点の比較では、8下位尺度すべてにおいて3群間で有意差はみられなかった。

### 3.2.3.3 3年生の日本語版 EPSI 得点の比較

信頼性、自律性、自主性、勤勉性、親密性、生殖性、統合性では、3群間で有意差は見られなかった。同一性においては、看護大学生と国家試験のある大学生および国家試験のない大学生の間に有意差がみられた(それぞれ  $p=0.027$ ,  $p=0.004$ ).

### 3.2.3.4 4年生の日本語版 EPSI 得点の比較

4年生の各下位尺度の平均点の比較では、8下位尺度すべてにおいて3群間で有意差はみられなかった。

## 4. 考察

A大学の全学生の日本語版 EPSI の得点比較において、有効回答における8下位尺度全体の得点の平均値である3.12を基準として、各下位尺度得点の平均値を概観してみると、信頼性、自律性、自主性、生殖性の4項目で3群ともに低い得点となっていた。その一方で、同一性、親密性、統合性では高い得点となっていた。A大学は医療系大学であり、多くの学生が将来の職業を決定して入学している。また、医療職という人を支援する職業を目指していることから、同一性や親密性、統合性の得点につながっていると考えられる。しかし、信頼性、自律性、自主性の得点の低さから、自信のなさ、自分の決定や行動に不安を感じていることが推測できる。学生は、自分の進みたい方向や将来の職業は決定しているものの、学習が進む中で、迷いや戸惑いを感じていると考える。チームで働く医療福祉の現場においては、対象者に共感し、受容的に関わるのが求められる。同時に、それぞれの専門性の中で判断や決断をし、責任をもつことも求められることから、低い3下位尺度の発達を促すことが必要であると考えられる。

また、看護大学生は自主性、同一性が国家試験のない大学生と比較して有意に高く、生殖性が国家試験のある大学生と比較して有意に高かった。物事に対して積極的に取り組み、自ら決断し、そのことに責任をとろうとする自主性、この自分でよいという自己肯定感と自信を持つという同一性、他人や社会に尽力し役に立ちたいという生殖性の感覚は、絶えず対象者の立場にたって、対象者に不利益や苦痛が生じないように、対象者の意思決定や権利を遵守する倫理的行動が必要となる看護職としての特性と通じるものがあり、高い得点につながったと考える。

学年別の3群比較では、1年生の国家試験のない大学生は国家試験のある大学生と比較して生殖性の得

点有意に高かった。先行研究<sup>12)</sup>では入学時における看護大学生の勤勉性と生殖性の高さが示されていたが、本研究では有意差はみられなかった。先行研究では看護大学生と看護専門学校生と私立大学の文学部の学生の比較であり比較対象が違うこと、また、2005年以前の調査であり、大学全入学時代とも言われる現在では社会が変化していること、調査時期が違うことなどから、単純に比較して傾向を述べることは難しいと考える。しかし、看護大学生は他2群と比較して、生殖生の得点に有意差は見られなかったものの、全体と比較して得点が低いわけではないことから、先行研究と同様に、調査対象の看護大学生は他人や社会に尽力して、福祉、教育などの向上に役立ちたいという看護への適正を備えた学生であると考えられる。

3年生では、看護大学生は他の2群と比較して同一性の感覚が有意に高かった。調査を実施した時期の看護大学生の3年生は、領域実習を2/3程度終えている頃であった。COVID-19流行による、実習内容の変更、実習期間中の生活や移動の制限等の影響を受けながらも、領域実習での様々な経験や対象との関わりを通して自身の成長を感じ、実習を乗り越えつつあることが自信につながり、看護職を目指す自己について同一性の感覚として「この自分でよい、この自分でやっていける」と思うことができたことから、高い得点となったのではないかと考える。また、近年の看護大学生は、家族構成の変化などにより多年代との交流が希薄であり、臨地実習において看護の対象となりうる高齢患者およびその家族に看護学生として接すること、看護を初めて主体的に実践することのない看護師とのやり取り、という新たな学習環境からくる緊張、既習の学習内容を実践の場で展開する不慣れさ、などに対して困難を感じる<sup>10)</sup>とされている。しかし、学内ではない臨地での実習において自分で看護をすることの手答えや意味づけができた学生の成長は大きく<sup>20)</sup>、そのことが3年生における同一性の感覚へとつながったのではないかと考える。また、患者との関わりの中で、患者の人生を通して自らについても考える機会となり、統合性にもつながるような同一性の感覚となっていたと考えられる。

2年生と4年生では、8下位尺度全てにおいて3群間で有意差は見られなかった。2年生になると、どの学科においても講義の多くが専門科目となり、演習や実習なども始まる。そのため、学科の違いや国家試験の有無により、日本語版 EPSI の得点が異なると予測していたが、今回の調査では3群間に差は見

られなかった。マーシアは、同一性の達成状況について、自己の所属性の統合度と危機に対する対処様式から、同一性達成、モラトリアム、早期完了、同一性拡散の4つの同一性地位に類型化した<sup>13)</sup>。このマーシアの同一性地位の視点から考えると、将来就きたい職業を決めて入学したものの、2年生では、専門的な講義や演習、実習が進むことで将来に対する迷いや葛藤という危機に直面し、自分の中で可能性を模索し対応していくモラトリアムの期間にある。そのため2年生では、3群間で差がみられなかったのではないかと考える。その後、3年次、4年次と学年を経るにつれて、学生はそれぞれに様々な経験をして成長し、職業決定という同一性地位の達成に至っていくと考えられる。そのため卒業を控えた4年生では、再度心理社会的発達の感覚に差はなくなっていると考えられる。また、A大学ではどの学科も医療福祉人の育成を目的としており、この目的に沿った学生指導が行われている。どの学生も人を支援する職業に就くことを意識して学生生活を送っており、国家試験が課せられているかどうかによって心理社会的発達の感覚に大きな違いはないことが示唆された。

学生の心理社会的発達の感覚を高めるためには、大学での学びは、学業に限らず、生活面での主体的な行動によっても得られ、充実した学生生活が学生の成長の糧になっている<sup>19)</sup>ことを理解し、学生生活においても、可能な範囲で学生の活動を促すことが必要であると考えられる。また、学生と教員の関わりも重要である。服部<sup>11)</sup>は「幼少期からの遊び、学び、情動体験の欠乏に起因する現代青年の未熟性は、高等教育機関の学生全般に概ね当てはまる。このことを教師はまず認識しておく必要がある。人間性の各側面が年齢よりも未熟であっても伸びる可能性があることを信じて人間的な成長を促すことが大切である」と提言している。教員は、学生が様々な経験を通して心理社会的に発達していく途上にある存在だと認識し、学生との信頼関係を基盤として、肯定的な関わりを行い、学生の成功体験を助け、学生が安心感を得られ、またそれを維持できるような環境

を作ることが重要である。そうすることで、学生の心理社会的成長を促す一助となるのではないかと考える。

## 5. 結論

全学年の日本語版 EPSI の得点比較において、看護大学生は自主性、同一性が国家試験のない大学生と比較して有意に高く、生殖性が国家試験のある大学生と比較して有意に高かった。1年生の国家試験のある大学生は、国家試験のない大学生と比較して生殖性が有意に低かった。3年生の看護大学生は、国家試験のない大学生と比較して同一性が有意に高かった。2年生と4年生では8下位尺度全てにおいて3群間で有意差は見られなかった。

A大学は医療福祉の総合大学であり、全ての学生が人を支援することを意識した学生生活を送っていることから、全体としては3群間で日本語版 EPSI 得点に大きな差はなかったと考えられた。しかしその中でも、3年生の看護大学生は同一性において、他の2群との有意な差があった。本調査時期は、11月末から1月であり、看護大学生は、看護を学ぶ中で最も重要かつ学びの深い領域実習の終了が2/3程度終了した時期であった。領域実習での様々な経験や対象との関わりを通して自身の成長を感じ自信となったことから、同一性の感覚につながったと推測できる。学生の様々な経験が心理社会的成長を促したとも考えられる。

## 6. 研究の限界と今後の課題

本研究結果は、1校のみの調査結果であり、一般化は難しく、また、調査対象の学科・学年により回収率に差があり、対象の特性の偏りが結果に影響していると考えられる。また、COVID-19流行による大学生活の変化が回答に影響した可能性がある。本研究では横断的調査を行っており、その結果は因果関係を示すものでなく、関係性を示しているに過ぎない。今後は調査時期も考慮して縦断的な研究を行い、本結果に見られた関係性についてより詳細な検討を行っていく必要がある。

## 倫理的配慮

Microsoft Office Forms の設定として、アンケート送信者のメールアドレスが結果に表示されないように設定し、事前テストにおいて研究指導者とともにアンケート送信者のメールアドレス等の個人が特定できる情報が表示されないことを確認した。

調査依頼用紙には、調査は無記名式であること、また調査への参加は任意であり、参加しない場合でも不利益が生じることは一切ないこと、調査結果は研究以外の目的では使用しないこと、すべてのデータは匿名化されており個人の特長はできないこと、匿名回答となるためアンケート送信後の同意撤回はできないこと、データの取り扱い及び破棄の方法を明記した。研究参加の同意確認は、質問項目のはじめに設けた調査協力の同意欄へのチェックの記入をもって行った。

本研究を実施するにあたり、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得た（承認番号21-054）。  
本研究には、申告すべき利益相反はない。

#### 付 記

なお、本研究は2022年度川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科保健看護学専攻修士論文の一部を加筆修正したものである。

#### 謝 辞

本研究にご協力いただきました A 大学の皆様に心より感謝申し上げます。

#### 文 献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書。 [https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_07297.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html), 2019. (2022.6.17確認)
- 2) 日本看護協会出版会編：令和3年 看護統計資料集。日本看護協会出版，東京，2022.
- 3) 一般社団法人 日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会：2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査 A 調査・B 調査報告書。 <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyouaAB.pdf>, 2020. (2022.11.12確認)
- 4) 秋田由美，高橋泉，弓気田美香，山口明子：小児病棟以外での小児看護学実習に関する文献研究。駒沢女子大学研究紀要（人間健康学部・看護学部編），2，105-114，2019.
- 5) 塩田久美子，三井督子，香月毅史：看護学生の自己教育力を育成する臨地実習指導の在り方に関する文献的考察。淑徳大学看護栄養学部紀要，4，61-67，2012.
- 6) 山本裕子，上山和子：小児看護学実習の困難とその対策に関する文献検討。新見公立大学紀要，39，163-169，2018.
- 7) 佐藤朝美，古村美千代，堀田昇吾：ピア・ラーニングを活用した“ペア受け持ち制”小児看護学実習における学生の体験。日本小児看護学会誌，27，73-82，2018.
- 8) 園田麻利子，花井節子，上原充世：自己効力感を高める実習前教育のあり方の検討。鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要，12，64-81，2008.
- 9) 佐居由美，石本亜希子，伊東美奈子，大橋久美子，大久保暢子，佐竹澄子，蜂ヶ崎令子，菱沼典子：看護学導入期の学生の困難性に対応した Web 教材の開発。聖路加看護学会誌，15(1)，17-26，2011.
- 10) 増尾美帆，泊祐子，竹村淳子，岩間恵，西蘭貞子，山地亜希，川島美保，山田恵子，神道那実，野口賀乃子，大西文子：小児看護学実習における看護実践と理論を結びつけるための指導方法の検討。日本看護学教育学会誌，26(1)，79-88，2016.
- 11) 服部祥子：人を育む人間関係論 援助専門職者として，個人として。医学書院，東京，2003.
- 12) 中新美保子，谷原政江，長江宏美，大場広美，太田にわ，砂田正子，山口三重子，留田通子，福山礼子：看護学生の心理社会的発達段階—看護大学生・看護専門生・非看護系学生の比較—。川崎医療福祉学会誌，15(1)，289-293，2005.
- 13) 中西信男，渡部貴美子，木原和子，渡部雅之，佐方哲彦，古市裕一，三川俊樹，水野正憲，藤田綾子：人間形成の心理学。ナカニシヤ出版，京都，1989.
- 14) E. H. エリクソン著，仁科弥生訳：幼児期と社会 I。みすず書房，東京，1988.
- 15) E. H. エリクソン著，中島由恵訳：アイデンティティ青年と危機。新曜社，東京，2017.
- 16) 佐々木正美：あなたは人生に感謝ができますか？エリクソンの心理学に教えられた「幸せな生き方の道筋」。講談社，東京，2012.
- 17) 若林満，後藤宗理，鹿内啓子：職業レディネスと職業選択の構造—保育系，看護系，人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連—。名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科，30，63-98，1983.
- 18) 高瀬園子，佐藤美佳，西沢義子：看護学生における職業的アイデンティティの文献レビュー。保健科学研究，9(1)，1-10，2018.
- 19) 奥田玲子，深田美香：看護学生の社会人基礎力の経年的変化と影響を及ぼす経験要因。米子医誌，70，13-24，2019.



- 20) 園田麻利子, 花井節子, 上原充世: 自己効力感を高める実習前演習のあり方の検討. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 12, 64-81, 2008.

(2022年12月24日受理)

## Characteristics of Psychosocial Development in College Nursing Students: A Comparison of Nursing Students and Other Medical Students

Akari ONO, Mihoko NAKANII and Keiko HIROKAWA

(Accepted Dec. 24, 2022)

**Key words** : nursing, nursing students, psychosocial development, Erikson Psychosocial Stage Inventory (EPSI)

### Abstract

The purpose of this study was to characterize the psychosocial development of nursing college students. This study was conducted using the Japanese version of the Erikson Psychosocial Stage Inventory. A cross-sectional survey using a web-based questionnaire was conducted among 4012 students enrolled at University A. Of the 1159 valid responses, 1157 were included in the analysis and divided into three groups: nursing students, students with national examinations, and students without national examinations, for comparison. Quantitative data among the three groups were compared using the Kruskal-Wallis test. In a comparison of scores on the Japanese version of the Erikson Psychosocial Stage Inventory for all grades, nursing students were significantly higher than the other two groups in initiative, identity, and generativity. Third-year nursing students were significantly higher in identity than students without national examinations. The third-year nursing students had completed about 2/3 of their field practice, which is the most important and deepest part of their nursing studies. Through various experiences and interactions with patients in the field practice, they felt their own growth and confidence and it can be inferred that the students felt a sense of identification. It can also be considered that the students' various experiences promoted their psychosocial growth.

Correspondence to : Akari ONO

Master's Program in Nursing  
Graduate School of Health and Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan  
E-mail : [wa319001@kwmw.jp](mailto:wa319001@kwmw.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.32, No.2, 2023 395–403)